スポーツ情報戦略の挑戦

豊田則成[1)]

The challenge of sport intelligence at BSSC

Norishige TOYODA

Key words：sport intelligence, coaching support, scientific analysis, feedback, and information technology.

はじめに

スポーツ学再考を課題とする本論において，ここでは，次の４点から論じてみたい．それは，１）スポーツ情報戦略とは，２）スポーツ情報戦略の果たす役割，３）スポーツ学を科学する立場，４）今後の展望，である．また，図１には，スポーツ学再考をテーマとした本シンポジウムにおいて本発表者の思考を視覚化したものである．その全てを語るには紙面に限界があるため，以下ではその一端をご紹介したい．

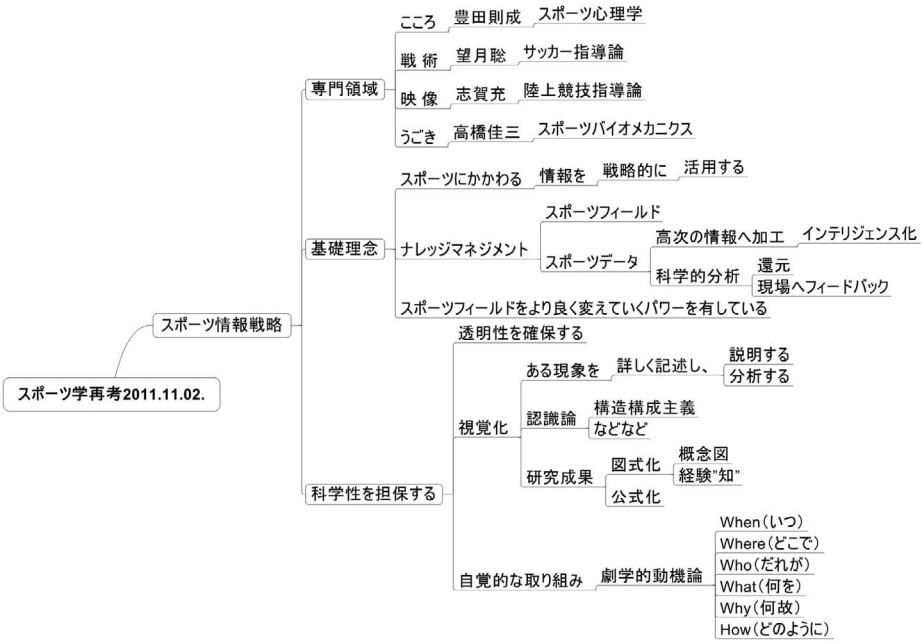
１）スポーツ情報戦略とは

そもそも，「スポーツ情報戦略（sport intelligence）」とは，「スポーツにかかわる様々な情報を戦略的に活用すること」に他ならない．スポーツフィールドをより良く変えていくために，我々は，様々な形での情報をデータとして獲得し，有効活用しなければならない．そのデータを一次的な情報と位置づけると，より高次な情報へと加工することで有効性が増し，再びスポーツフィールドへ正しく還元することができるようになる．このようなプロセスの中には，２つの鍵概念が存在している．それは，「科学的分析」と「還元」である（豊田ら，2007）．

まず，「科学的分析（scientific analysis）」について述べる．スポーツフィールドで得た一次的な情報を高次の情報へと加工するためには，最新のIT（Information Technology）を駆使し，分析・検討することが強く求められる．昨今のスポーツの高度化に伴い，スポーツに対するニーズも多様化し，それを満たすための情報も氾濫している．そのような中から，必要な情報を取捨選択し，時には加工し，より一層意味ある情報として活用していくためには，「科学的分析」を駆使することは免れ得ないものといえよう．しかし，その情報における「科学性」を担保するためには，どのような認識論が必要となるのかという疑問が残る．これについては，後述の３）で触れる．

次に，「還元（feedback）」について述べる．上述のプロセスによって獲得された高次の情報（intelligence）は，スポーツフィールドをより良く変容させることのできるパワー（power）を有していなければならず，それを如何にして正しくフィードバックするのかを重要視しなければならない．そのような視点に立つと，これは，スポーツ指導のあり方を問うことにも共通する課題であることが自明となる．すなわち，コーチングとスポーツ情報戦略を差別化するためには，「スポーツ指

１）競技スポーツ学科



【図１：スポーツ情報戦略の役割】

導支援（coaching support）」という説明概念が有効になる．これについては，次の２）で触れることにする．

２）スポーツ情報戦略の果たす役割

本学におけるスポーツ情報戦略は，「スポーツ指導支援（Coaching Support）」を目指す企てを意味している．すなわち，「こころ」「うごき」「作戦」「映像」といった分析領域から，スポーツに関わる情報をインテリジェンス化し，スポーツ指導場面において支援的に機能することを目指している（豊田，2008）．

スポーツを捉える視点は，スポーツを「する」立場から，スポーツを「みる」立場，そして，スポーツを「ささえる」立場へと拡大してきた．すなわち，スポーツの高度化に伴って，スポーツへの関わり方が選手／実施者としての一人称的な関わりから，指導者／観衆といった二人称的な関わりを経て，アナリスト／ボランティアといった三人称的な関わりといった多様性を生み出しており，そのような背景にあって「スポーツ指導支援」は，まさに「ささえる」立場からスポーツへアプローチしているといえよう．

このように，スポーツへの関わり方が多様化／拡大するなかで，スポーツ情報戦略がスポーツ学において果たす役割は，新たな視点からのアプローチを許容することにある．

３）スポーツ学を科学する立場

スポーツ学を科学するために重要なことは，①研究の透明性を確保する，②研究成果を視覚化する，③自覚的な取り組みである，といった３点であるといえる．

まず，①研究の透明性を確保するとは，スポーツ学研究に取り組む場合，方法論的な透明性を確保することで，研究成果の再現性を高めることができる．それは，研究自体の信頼性を高めることにもつながる．すなわち，どのような手続きで研究を遂行したのかはもちろんのこと，それを遂行した研究者自身の「質」をできる限り開示することで，その研究者の視点が明らかとなる．研究者がどの視点から研究事象を眺めているのかについての情

報は，その研究の「質」を見極める上でも重要な情報となる．

次に，②研究成果を視覚化するとは，研究の公共性を確保することを促す．研究によって導きだされた「優れた理論」が優れていると評される所以は，その理論に非の打ち所がないということよりも，それを基に様々な議論が発展継承的に展開されることにある．研究成果を視覚化することによって，研究成果を議論の土壌に上げることができ，そのことが「優れた理論」を導きだすための一助となり得る．例えば，スポーツにおける経験“知”を導きだすためには、口承のみでは限界があり，これを詳しく記述し，分析し，概念図をもって説明すると良い．すなわち、研究成果を図式化することによって様々な議論が可能となる．例えば，我々は構造構成主義といった認識論に立って現象を理解しようと試みることにより，自らの立脚点を明示することにもつながる（西條，2009）．

最後に，③自覚的な取り組みであるとは，5W1Hがひとつの鍵概念となろう．それは，研究者が自らの取り組みについての劇学的動機（バーク，1982）ともいうべき6つの要素「When（いつ）」「Where（どこで）」「Who（だれが）」「What（何を）」「Why（何故）」「How（どのように）」が明らかにしていなければならない．一方，このような劇学的動機を明確にすることない無自覚的な取り組みは，研究成果をスポーツフィールドにフィードバックする際に，方向性を失わせ，研究と現場のギャップを生み出す根源となってしまい，両者の間に信念対立を生じさせ，結局，修復不可能な亀裂を生み出してしまう恐れがある．細心の注意が払われねばならない．

このように，スポーツ学のみならず，研究者の立脚点を明らかにすることによる科学性の担保は免れ得ない必須でもある．

4）今後の展望

いわずもがな，「スポーツ情報戦略」という言葉の独歩感を払拭することはできない．なぜならば，国立スポーツ科学センター情報戦略部や仙台大学スポーツ情報・マスメディア学科，本学競技スポーツ学科スポーツ情報戦略コースなど，先駆的な取り組みがなされてきているものの，それぞれが共通した形での位置づけを有している訳ではなく，スポーツフィールドにおける認知度もまだまだ低いと言わざるを得ないからである（和久，2008）．そのような背景にあって，本学スポーツ情報戦略コースは，「スポーツ指導支援」に貢献する人材の育成を目指している．その教育内容については，次のような説明によって代えることができる．

本学スポーツ情報戦略コースの教育概念は，①科学的分析力と②還元力を養うことに集約することができる．前者は，スポーツフィールドに散在する様々な情報を，科学的分析を通じて高次の情報すなわちインテリジェンスへと加工する能力を養うことを指し，後者は，そのインテリジェンスをスポーツフィールドへ正しく還元する能力を養うことを指している．これら2つの概念を鍵として，スポーツ心理学（こころの分析）やスポーツバイオメカニクス（うごきの分析），スポーツ戦術論（戦術の分析），スポーツ映像処理論（映像の分析）を中心に，専門的な教育体制を組んでいるのが現状である．

我々が関わるスポーツフィールドには様々なデータが散在している．それは，生理的であったり心理的であったり，様々な質的の情報を有したデータといえる．これらのデータを直接的にスポーツフィールドへフィードバックするには，多くの限界が生じることは想像に難くない．すなわち，我々は，スポーツフィールドに横たわっているデータを有益な情報へと加工し，スポーツフィールドをより良く変えていかねばならない使命を帯びている．そのように鑑みると，スポーツ情報戦略は，学際的な性質をもった企てであることに他ならない．その最終的な目的は，スポーツ

フィールドをより良く変えていくパワー（先に示した還元力をさす）を有していなければならない．

ちなみに，このような企てには，科学性を外して論じることはできない．すなわち，スポーツ学におけるスポーツ情報戦略は、科学性を担保しつつ押し進められなければならないのである．

【文献】

バーク（1982）動機の文法（森常治 訳），晶文社：東京.（Burke, K.（1952）A grammar of motives. New York: Pretice-Hall, Inc.）

西條剛央（2008）看護研究で迷わないための超入門講座，医学書院：東京.

豊田則成（2008）スポーツ情報戦略とは．びわこ成蹊スポーツ大学編　スポーツ学のすすめ．大修館書店：東京，pp.174-178.

豊田則成・志賀充・高橋佳三（2007）スポーツ情報戦略の可能性．びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要，第 5 巻：159-165.

和久貴洋・阿部篤志・粟木一博・豊田則成（2008）平成19年度JISSスポーツ医・科学事業 課題研究：我が国の国際競技力向上のための情報戦略コミュニティー形成におけるJISSと体育系大学との連携の在り方に関する調査研究報告書.